



# こんぴらさん障壁画の謎

— 若冲・岸岱をめぐって —

## 【第8章】

# 金砂子

土居次義氏は、若冲筆《垂柳図》の一部である《飛燕図断片》(定蓮寺)に金砂子が認められず、「奥書院障子装飾之記」には白紙に描いたと記されることから、《百花図》に撒かれた金砂子は後補によるもので、中川馬嶺がその指導を行い、補筆がされたと推測している<sup>1</sup>。馬嶺は上段の間に天保15年9月の賛がある《水墨山水図》を描いたほか、所伝では上段の間東側の障子腰貼付の《花卉図》も描いたといわれており、そこには金砂子が施されている。

中川馬嶺(1783~1860)

『讃岐画家人物誌』に「名ハ勝次字ハ永年長町竹石ニ学ヒ一家ヲナス筆力蒼勁ニシテ山水四君子ヲ画キ悉ク其妙境ニ至ル萬延元年庚申八月歿す年七十七」と記される。

小豆島の馬越家に生れ、馬嶺、青崖の號があった。高松の中川家の養子となり、高松で有力な画家であった長町竹石(1757~1806)に画を学んだ。後、一家を成し、また子の愛山、馬石、さらに愛山の子の愛竹、愛梅をはじめ門人も多く輩出し高松で有力な画派を形成した<sup>2</sup>。



百花図金砂子部分



『古老伝旧記』によると、天保8年(1837)に表書院の煤ぬきと金砂子撒き、中川馬嶺による補筆が行われ、さらに持仏堂の障子腰に虎を描き3月18日に出来たという<sup>3</sup>。そして、馬嶺が表書院玄関に水墨で松を描いた作品が同年3月19日に成就した。表書院の修復について渡邊一氏は「聞く所によれば明治維新前に中川馬嶺によると、明治16年に森寛齋によるとの二度の修復が加えられたといふ。砂子が最初から置かれていたか否かは明かでないが、少なくとも今全体を通じて著しく多過ぎるのは主として前の馬嶺の際に、又虎、鶴などの毛書の補のあるのは後の寛齋の際に加へられたものらしい<sup>4</sup>」

と述べている。《百花図》の過剰に見える金砂子を見ると、奥書院の手入れも中川馬嶺が手掛けた可能性は十分考えられる。

もちろん、金砂子撒きが一度だけとは限らず、天保15年(1844)に至るまでに施されていた可能性もなくはない。此度の修理を行った岡墨光堂の調査によると、本紙欠失箇所には過去の修理で裏面より充てられた補修紙に本紙を跨いで砂子が撒かれており、修理の際に砂子が施されたのは明らかである。

奥書院障壁画は天保15年(1844)、明治33年(1900)、明治42年(1909)、大正11年(1922)と修理を受けており、その際に撒かれた可能性が考えられる。



特記写真3 本紙と補紙に砂子が蒔かれている(百花の図右から3) 若松図・百花図修理報告書(株式会社岡墨光堂)

しかし、神社の史料から金砂子撒きの記録は見いだせていないため、奥書院の様子が記された他の文書から探してみたい。

古社寺保存国宝計画調査のため、金刀比羅宮所蔵の宝物調査が小杉楹邨によって明治33年(1900)5月29日・30日に行われた<sup>5</sup>。小杉楹邨の調査日記のうち、香川県内の箇所を松岡調が筆写した『国宝さぬき日記』5月29日の条には、昨年の暴風により書院の屋根が破損し葺替えせねばならず、翌月20日頃に小松宮総裁殿下(小松宮彰仁親王殿下)も滞在されるので、序に表書院・奥書院の障壁画を裏打ちしていることが記されている。記事内には、

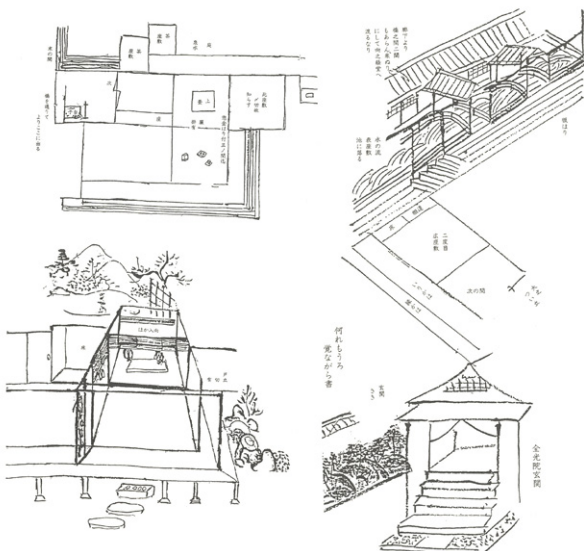
され奥の上段なる柳の間に請す。此張付は、天保五年に岸岱に、青柳に鷺をかきしめたり。上段内の金はり付ハ、若冲か草木の花の折枝をかき尽し、一の間若松金張付、二の間花あやめに梅花、雞、水雞の類、三の間その柳也。さて長押の上に群蝶を敷かく。みな極彩色也。むかしハ上段の間の如く、みな若冲なりしを、岸岱に改めしといふ。



と記される。「上段内の金はり付」が金砂子をも示すのであれば<sup>6</sup>、明治33年(1900)時点ですでに撒かれていたことになる。

次に、日向国延岡藩主・内藤政順夫人の充真院が金毘羅参りを3度しており、その内2度の旅日記に詳細な記事が残されている<sup>7</sup>。まず、文久3年(1863)4月から6月にかけて江戸から延岡へ帰国したときの紀行文『五十三次ねむりの合の手』に記される5月15日金毘羅参りの記事をみてみよう。参拝の折、駕籠に揺られたせいや暑さのためか気分が悪くなり、金光院本坊で休憩している様子が記される。書院の玄関や奥書院の間取りのほか休憩した部屋の様子が吹抜屋台で描かれている。奥書院のあたりから記事を引用すると

又少々段を上りて又広き座敷有、こゝに居事哉と思へは又奥の方へつれ行、十二畳計も敷たる所に入てこも通りこし大なるつい立有、其わきに台子立有、其上の座敷は立三間、横二間も座敷金はり付、其上之間の中しきりにはみすも掛けつよふ成座敷にとをし是にと云、其脇の上座敷にも釣簾掛たみ二枚敷有、折廻しに入かは有成、庭打こし海の方みゆるさぬき富士と云はあの山かと市右衛門尋しかは左也と云、庭にはよく作れる植木石とろうろ杯も有、今た皐月の丸作之木は花盛、上段をとをりて向へ行用所、左へ行は茶座敷と水やも有て夫を前へ行は元の次之間へ出る、向は庭にて泉水つき山も有也、座に付は茶たはこ盆し候、気分悪く少し休居候と、枕とともふせんに奉書紙をまきて出し候まよくも気が付て趣向出来候とわらひぬ、ねりやうかんと干くわし出し候、至て宜敷風味之由、八ツ比に成し故今た皆昼せへす空腹に成候間皆々かわり／＼に下山してたへんと云、そのうちには私もよからんと云、少々して気分も直りしまゝ元の茶やへ行かん、…



内藤家文書「五十三次ねむりの合の手」(明治大学博物館蔵)より、書院・奥書院挿図(文久3年(1863))

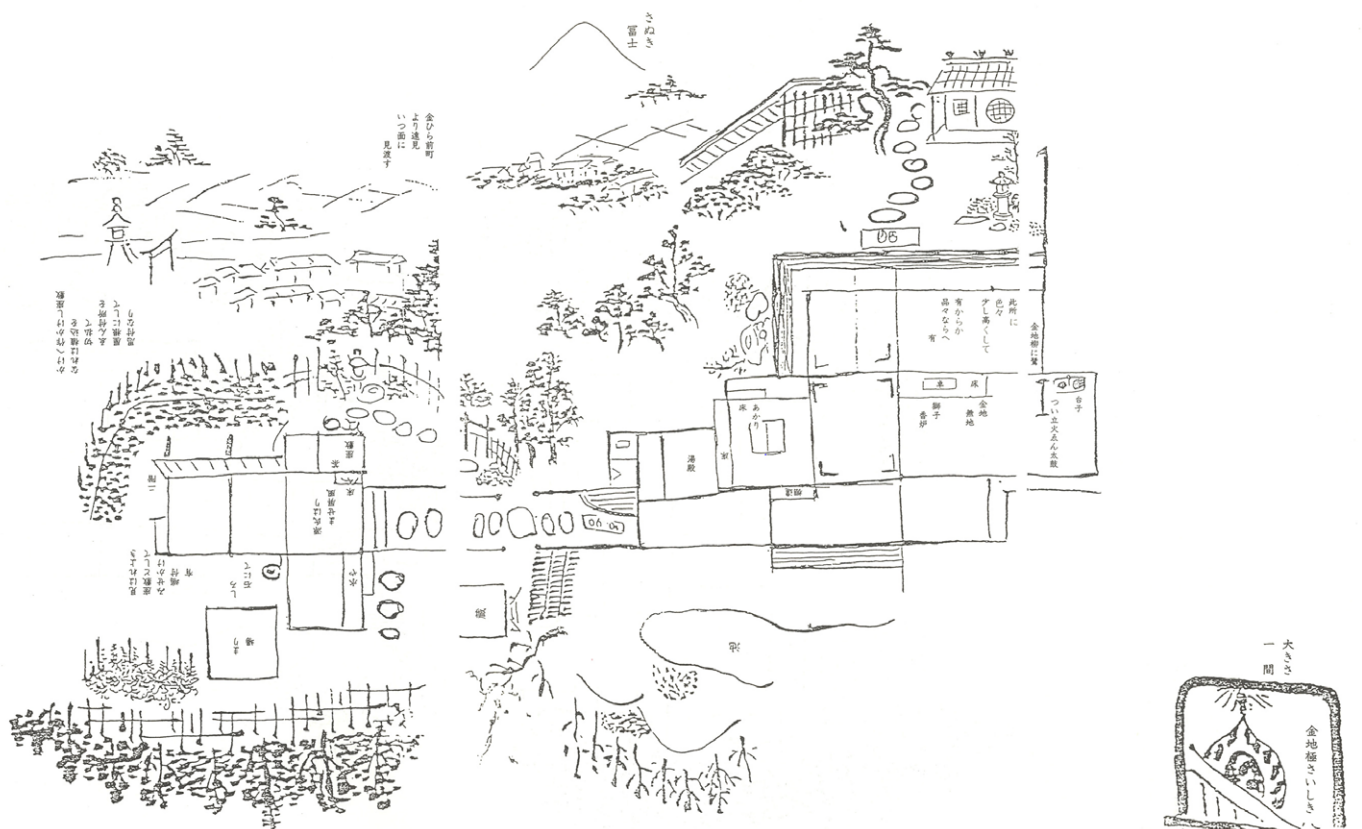
気分が悪いながらも書院の様子を克明に記してある。挿図には「何れもうろ覚ながら」と記されている。障壁については、立三間(縦約540cm)、横二間(横約360cm)の座敷は金はり付と記されるのみで、残念ながら図様についての記述はないものの、挿図には、春の間に畳が敷かれ、菖蒲の間に茶やたばこ盆が描かれている。春の間と菖蒲の間にかけて「惣金はり付三ノ間迄」と記し、上段の間には「此座敷メ切故知らず」と上段の間は閉じられており見られなかったことが窺える。

次に、元治2年(1865)3月に延岡から江戸へ帰府した紀行文『海陸返り咲ことはの手拍子』に記される4月4日金毘羅参り(実際の参拝は5日)の記事をみてみる。前回もそうだが「桜や」という旅館が延岡藩の定宿のようだ。今回は体調も悪くならず無事参拝し「今日は清め候かひには先滞なく拜し御礼も申上し嬉しさはいはんかたなくはる／＼の海山をこして行ぬるかひにて、中々私の身にて二度迄も登山するといふもふし義成事有難さ／＼只々涙の落るのみ、…」と感謝と喜びが記される。金光院より「先例も有事ゆへせひ／＼寄候やうとの事ゆへ」と寄っていくよう勧められ書院へ行く。

(略)大書院へ行とは是も初にかけける如くいつれもりつは成事にてこも行すき奥の間にとをす、四之間之入口には大きなつい立にして金地にかゑん太鼓之極さいしきにしたる絵也、夫を入は四ノ間は十六畳にして向に入かわ有て庭を見二間床張、爰は金地に柳鶯の極さいしきの絵也、床掛物候て唐絵の山水大たて物一幅大き成唐金之きりんの香爐台も青貝なる卓、三ノ間は金地に水草杜若夏の鳥をあひしらい両角に唐絵金屏風を置、こゝは十畳梨子地の手付たる煙草盆火入は太鼓にしたる方也、よもやたはこ御入有ましと思へは入有之きせる一對銀也、中しきりはほり物は色々の蝶、三ノ間は八畳にしてはり付は金地に桜に小鳥、中しきりのほりは色々したる扇子多也、四方に又金之墨絵の屏風有釣簾かり有、上ノ間は上段にしてらんまのほりはだんせん菊也、張付は金地に四季の花の枝折、床には古きものと見へし唐絵の山水の掛物一ふく、床おきは岩に鳩らしき鳥二羽計も居、香爐に唐木ならんあかほりしたる台、明床之上之すかしは霞に鶴、下は懐紙すり違棚といふ所を横手にして、此思ひ付は珍らしく真中に棚つりし様也、うんけんへりのしやう畳二ツ真中に<sup>うんけんへりとは赤字に筋有へり也</sup>

跡はこのこらす高らいへり也、杉戸は椿に小鳥、上段之間は此前には締きりて有ゆへ初て見、二ノ間にしやうたみ有、二ノ間と上段ノ間には鉤簾かけ有、向之入側方はへ出れはつき山泉水も有、用所へ行先には湯殿、茶座敷、其外之所は初て知れぬ、三ノ間之入側には少し高く台して夫にもうせんを引て此寺の重宝物とてならひ有、…(略)





内藤家文書「海陸返り咲こと葉の手拍子」(明治大学博物館蔵)より、奥書院挿図(元治2年(1865))  
金光院図と比較しても正確に奥書院の間取りや周辺が描かれていることが分かる。

表書院の障壁画については「いつれもりつは成事」と詳しい記述はない。また富士の間も記述はなく、岡本常彦が慶応2年(1866)に描く以前でありどうなっていたのか不明である。

挿図には岸岱筆《陵王図・桜樹太鼓図衝立》や奥書院・数寄屋の間取り、さぬき富士や高燈籠などが描かれており、奥書院北側の数寄屋には源氏絵の屏風を置き、数寄屋西側に鞠場があることがわかる。「三日前より案内有しゆへ寺をみせんと色々かさり附たる物ならん」と充真院のため金光院内(書院)に掛物や屏風、柳の間に色々な宝物を並べ飾り立てていたようだ。院主の宥常ともこの時面会している。数寄屋は全生亭と呼ばれており二の間6畳の部屋に、文久元年(1861)冷泉為恭が描いた《天井龍図》が設置されていたはずだが充真院の日記に記述はない。今回は奥書院各室の画について、四ノ間は「金地に柳鷺の極さいしきの絵也」、三ノ間は「金地に水草杜若夏の鳥をあひしらい」、二ノ間は「三ノ間は八畳にしてはり付は金地に桜に小鳥(三ノ間ではなく二ノ間の書き間違いと思われる)」と記されている。三ノ間「申しきりはほり物は色々の蝶」とあるのは、菖蒲の間長押上に描かれている《群蝶図》のこのようだが、欄間の彫り物と誤って記してある。また、二ノ間は岸岱が若松に春の草花を描いており、桜に小鳥の画ではないのでこれも記憶違いであろうか。「しきりのほりは色々したる扇子多也」は菖蒲の間と春の間の境にある扇面散し透彫欄間のことで、「上ノ間は上

段にしてらんまのほりはだんせんに菊也」は春の間と上段の間の境にある菊花紋透彫欄間のことである。そして、今回は縮め切られていた上段の間を今回は見ることができた。上段の間について「張付は金地に四季の花の枝折」と金地(金砂子)であることが記される。そして、上段の間西側にある丁子棚の挿図に「内迄色々の花書有」と記される。

充真院の紀行文から元治2年(1865)4月4日(実際は5日)時点で《百花図》に金砂子が撒かれていたことがわかった。詳細な記事と挿図により当時の奥書院や数寄屋の様子を知ることができるため金刀比羅宮にとっても貴重な史料といえる。

よって、土居氏の考察通り、天保15年(1844)の修理の際に撒かれた可能性は高いと思われる。

《百花図》の金砂子を見ると、絵画的な表現のため効果的に使用したという感はなく、とにかく素地の余白を埋めることが目的だったようにみえる。

つまり、残すことになった《百花図》の経年劣化による紙の黒ずみや傷みを隠すため金砂子を施すことになり、岸岱がそれに合わせ金地に描いた、あるいは岸岱の金地に合わせるため《百花図》に金砂子を施したということである。いずれにせよ画面背景を金で統一し、上段の間と他3室との調和を図ったのだろう。

余白を埋めることだけが目的であれば、金砂子は表具師によって



撒かれた可能性も考えられるが、画家が撒いたとすれば天保15年(1844)から元治2年(1865)の間で以下の画家が記録に残る。

天保15年(1844)、岸岱・有芳・岸光、奥書院障壁画描く。

中川馬嶺、奥書院上段の間の小襖描く。

弘化4年(1847)、合葉文山、寺内の絵図描き写す。

神前彩色に森寛齋・合葉文山加わる。

嘉永2年(1849)、合葉文山、表書院障壁画模写。

嘉永6年(1853)、森一鳳、登山お目見。

安政5年(1858)、森寛齋、本宮彩色。

安政6年(1859)、森寛齋、表書院襖手入。

万延元年(1860)、冷泉為恭、作品制作・宝物調査。

文久元年(1861)、岡本文彦、屏風一双に社領内一円の図を描き終わる。

文久2年(1862)、高松の絵師安原枝澄に宝物描き写させる。

公的空間に豪華で権威・権力を示す素材として総金地張りとするのは好まれるが、岸岱が住職の私的空間といわれる奥書院を金碧障壁画としたのはなぜだろうか。プライベートな生活空間は白紙に淡彩や水墨で描かれ山水図など落ち着いたものが選ばれることが多い。暗い室内を金地にすることで明るくみせる効果は考えられるが、金の輝きや威圧感が勝り、落ち着いた生活空間とは感じられない。岸岱は平面な装飾画である《百花園》に合わせるため、敢えて金地を採用することでモチーフの草花や鳥より奥にある風景を描くことなく、空間の広がりや立体的な表現を抑制した平面的な画面

構成となるよう意図した可能性はないだろうか。存外、私的生活空間と解釈してきた奥書院は別当の館ではあるものの、宥黙の時代頃には日常過ごす生活の場は数寄屋や別の建物であり、奥書院は金光院を訪れた貴顕を応接するための第2の客殿としての機能が優先され金地としたのかもしれない。



〔当宮絵図類〕金光院図(金刀比羅宮蔵)

江戸時代後期

※表書院に仏間があることから天保12年(1841)以前の図と思われる。但し、天保15年(1844)の改築でもともと奥書院春の間にあった上段の間を北側に移設したとする説もあり、そうであれば、本図は天保15年以降のものとなる。(本稿では奥書院上段の間北側移設は享保2年(1717)とする説を採用する。)



〔当宮絵図類〕金光院図(金刀比羅宮蔵)

奥書院北西に宝蔵(安政4年(1857)8月1日上棟)、表書院の南西には護摩堂や阿弥陀堂があることから、江戸末期の図と思われる。宝蔵は大正9年(1920)8月21日～大正10年(1921)5月9日の工事で移転した。図は奥書院を中心に各方位を示し、鳴鳳多田の名が記されることから地相や家相といった方位の吉凶をみたものだろう。







- 1 ④土居次義「讃岐金刀比羅宮の伊藤若沖」『國華』、pp.15-16
- 2 ④土居次義「讃岐金刀比羅宮の伊藤若沖」『國華』、p.14
- ⑧「金刀比羅宮の名宝一絵画」解説、p.392
- 3 『金刀比羅宮史料』50巻「天保四年以降日記書抜」  
天保7年2月23日の条  
一、御玄閑床是迄青張二而有之候所去ル文政二年御張カヘニ相成松二猿公之絵御張  
附有之此度金地二松之画ニ相成高松中川馬嶺と申画師相認則今日張上ケ候也  
天保8年正月23日の条  
一、表書院御襖へ金砂粉蒔申候二付今日より取掛り候他表具師ハ高松與兵衛也  
一、御玄閑床是迄松二あんこふの画之所此度金張附ニ相成候事  
但三月十九日成就いたし候事  
天保8年2月2日の条  
一、菅新丸龜行是ハ表書院御襖張カヘ中間割ニ付掛合也
- ③「古老伝日記」『新編 香川叢書 史料篇(一)』pp.285-286  
一、御玄閑の床、金ばりに相成候事  
右は天保八酉年三月十九日出来、尤已前は青紙張に有之候所、文政式卯年松にあんこ  
う、其下に墨芝有之候墨絵之張床に相成、是は宥怡様御代也、然る所此度天保八  
酉年金ばり附に相成、墨絵之松、高松家中中川馬嶺と申画師相認候事  
一、表御書院應挙之画に補筆仕候事  
右は天保八酉年すぬき金砂子蒔、中川馬嶺補筆いたし候、猶亦持仏堂之障子の腰へ、  
虎一疋書き足し申候事、右同年三月十八日出来候也、  
『金刀比羅宮史料』15巻「天保八年金光院御用留」p.124  
(三月廿九日の條)  
一、此度御玄閑御床張付御仕替ニ相成高松画工中川馬嶺江為相書候事  
右ニ付謝義之所作事奉行川崎猪八より見込ヲ附申出候ニ付相談之上左之通り相送  
一金貳両 謝義  
『金刀比羅宮史料』54巻「天保十三年金光院日帳」p.171  
10月6日の条  
一、御玄閑御床張付松書繼致候二付 (朱書) 中川馬嶺 馬 齡 今日より登山致會書申候事  
一、表書院瀧書繼いたし候事  
一、御玄閑西北より通り之間へ之口此度襖ニ致候様御作事方へ申達候事
- 4 ②渡邊一「讃岐金刀比羅宮表書院の応挙の襖絵」『美術研究』、p.432
- 5 ⑨西牟田崇生「明治三十三年の金刀比羅宮宝物調査一『国宝さぬき日記』より一」『こと  
比ら』pp.316-341  
この調査によって、明治34年(1901)3月27日に、甲種三等として「紙本着色なよ竹物語  
絵巻一巻」と円山応挙筆「紙本墨画瀑布及山水図 上段及二ノ間貼付 廿二枚」、甲  
種四等として円山応挙筆「紙本墨画竹林七賢図 七賢ノ間貼付 十六枚」、「紙本墨  
画遊虎図 虎ノ間貼付 廿四枚」、「紙本墨画遊鶴図 鶴ノ間貼付 十七枚」、「絹本  
着色弁財天十五童子像一幅」が国宝に指定された。
- 6 若沖画の説明の前に「上段内の金はり付ハ」と記すことから、「上段内の金はり付」は上  
段の間の金砂子のこと、あるいは「上段内」は奥書院諸室のことを示し上段の間の金砂  
子と他3室の金地を合わせて「上段内の金はり付」と記したと思われる。
- 7 ⑦明治大学博物館「内藤家文書増補・追加目録8 延岡藩主夫人 内藤充真院繁子  
道中日記」  
⑥松原秀明「金刀比羅宮の所蔵資料について」『金毘羅庶民信仰資料集 年表篇』  
pp.78-79によると、日向国延岡内藤家は文化4年(1807)から嘉永4年(1851)まで計9  
回金毘羅に代参している。

参考文献

- ①松原竹坡「讃岐画家人物誌」香川新報社、1913
- ②渡邊一「讃岐金刀比羅宮表書院の応挙の襖絵」『美術研究』22、1933
- ③香川県教育委員会「新編 香川叢書 史料篇(一)」新編香川叢書刊行企画委員会、  
1979
- ④土居次義「讃岐金刀比羅宮の伊藤若沖」『國華』1046、pp.11-20、1981
- ⑤松原秀明撰「金毘羅庶民信仰資料集 年表篇」金刀比羅宮社務所、1988
- ⑥松原秀明「金刀比羅宮の所蔵資料について」(同書所収論文)
- ⑦明治大学博物館「内藤家文書増補・追加目録8 延岡藩主夫人 内藤充真院繁子  
道中日記」2004
- ⑧「金刀比羅宮の名宝一絵画」金刀比羅宮、2004
- ⑨西牟田崇生「明治三十三年の金刀比羅宮宝物調査一『国宝さぬき日記』より一」  
『こと比ら』62号、pp.316-341、2007